



浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

vol.150

1

2015.1.1

学 報



クリスマスイルミネーションで輝く附属病院外来棟・病棟中庭

目 次

○大学ニュース

- ・平成26年度解剖体慰霊祭 . . . 1
- ・開学40周年記念式典 . . . 5
- ・永年勤続者表彰 . . . 6
- ・人事交流職員との懇談会 . . . 7

○学会・研究活動等

- ・第26回日本生命倫理学会開催 . . . 7
- ・第48回日本小児内分泌学会開催 . . . 8
- ・第11回DIA日本年会を開催して
ー境界を超える医療イノベーションの夜明けー . . . 8
- ・第19回日本小児外科漢方研究会開催 . . . 9
- ・日本描画テスト・描画療法学会第24回大会を終えて . . . 9

○諸報

- ・研究助成金等の採択（平成26年9月～12月） . . . 10
- ・平成26年度厚生労働科学研究費補助金一覧 . . . 11
- ・会議 . . . 12

※各項目をクリックすると該当ページにジャンプします。

平成26年度解剖体慰霊祭

10月23日(木)午後2時から本学体育館において、解剖体慰霊祭が執り行われました。

この慰霊祭は、医学の発展のため本学における解剖（正常・病理）に献体された故人の御霊に対しご冥福をお祈りするため、ご遺族、白菊会会員及び新天会会員を招いて行われるもので、式は、黙とう、管弦楽演奏、献体者氏名奉読、追悼の辞、学長あいさつと続き、出席者全員による献花が行われ閉会となりました。

◇学長あいさつ

解剖体慰霊祭に当たり、浜松医科大学を代表して一言ご挨拶申し上げます。本日はお忙しい中、皆様方には、本学の解剖体慰霊祭にご参列いただきまして誠にありがとうございます。ご臨席いただきましたご遺族の皆様並びにご来賓の各位とともに、私達浜松医科大学教職員、学生一同、ここに謹んで御霊前に追悼の意を表わし、御霊の安らからんことを、お祈り申し上げます。

本年度、慰霊のお祀りをしました合祀数は正常解剖145体、病理解剖23体、受託病理解剖1体の計169体の御霊であります。本学の医学教育のためにご献体を賜りました「白菊会会員」、「新天会会員」の皆様から敬意を表わし、また、病理解剖にご同意いただきました、ご家族の皆様にも、心から感謝申し上げます。とくに、正常解剖においては、当大学の医学生及び看護学生約180名に加え、近隣の施設の看護学生及び理学療法士、臨床工学技師、鍼灸マッサージ師等を目指す学生たち、約160名が見学実習に来て、人体の解剖を学ぶため真剣に取り組んでおります。これらの学生達に代わり厚く御礼申し上げます。

さて、「解剖」には、「正常解剖」と「病理解剖」二つの種類があります。「正常解剖」は医学生、看護学生が人体の構造を調べるための解剖で、医学を学ぶ学生の教育に欠かすことができません。優れた医師になるために医学生にとって最も大切なことは、人体の構造を詳しく知ることです。そこで、医学生は「解剖学実習」を行って人体の構造を学びます。「解剖学実習」は医学教育の最初に履修する、最も基礎的な、最も重要な教科であります。学生にとって「解剖学実習」は、教科書の文字や図から得る知識とは異なり、複雑な人体の構造を実際に目にし、手で触れることによって人体の構造を正確に学ぶとともに、「生命の尊厳」、「医師の使命感」、そして「人間とは」な

学長 中村 達

どを考えさせられる貴重な教育の機会でもあります。医学の世界は留まるところを知らず進歩していますが、それでも解剖学実習には他の動物やiPS細胞をもってしてもご献体いただきました人体の代替となるものはありえないことはご存知のとおりです。医学生は、生まれて初めてご遺体と直面した時、さらにまた、生まれて初めてご遺体にメスを入れた時のことは、生涯忘れません。生命の尊厳に打たれ、震える思いがいたします。やがて、それが「医の倫理」、「正しい医療」にも通じて、医師として、人間としての成長につながるものと思います。私達の大学では、解剖学実習が終了し、ご遺体を火葬する際には、解剖をさせていただいた学生は、ご家族からご遺体のありし日のことをうかがいながら、火葬が終わるのを待ちます。そして、ご家族と共に収骨させていただいています。この時、学生はショックとも呼べるような感動を覚え、解剖学実習の前後では、これらの体験から明らかに学生は成長します。この感動こそが医療人に向けての成長過程で大事な教育になっていることと思います。

一方、病理解剖も極めて大切であります。「病理解剖」は、死後に病気の原因を解明するために病変を詳



しく調べ、診断及び治療が適切であったか、いったいからだの中に何が起こっていたのかを明らかにするための解剖で、医学の進歩にとって欠かすことができません。病理解剖の結果は、受け持ち医や看護師たちばかりでなく、指導医達にとっても大変勉強になることが多く、思わぬことが見つかることも多いため、実際同様な病気の患者さんにフィードバックして生かしていきます。病気の治療には正確な診断が必要であります。最近では、超音波診断、レントゲンCT、核医学、MRI、そして最新鋭のPET-CTのような診断機器が急速に進歩したことにより、かなり正確な診断が可能になりました。しかし、このように診断技術が進歩した今日でも、生前の診断がとてつもない困難な場合や、治療効果が十分上がらないことがあります。診断が極めて難しかった患者さん、非常に治りにくかった患者さんが亡くなられた際には、死後できるだけ早く解剖し、病巣部位を確認し、病変の種類、病気の原因を確定するため、病理学者によって詳しく検討され、正確な病理診断がなされることが、医学の進歩のために不可欠であります。このような「病理解剖」が人類の疾病に対する戦いにどれだけ貢献してきたか計り知れません。医学の進歩のために「病理解剖」の重要なことを、ご理解いただき、病理解剖にご同意いただきましたご家族の方々に心より感謝申し上げます。

◇追慕の辞

本日、ここに浜松医科大学の慰霊祭が行われるに当たりまして、在天の諸霊に一言追慕のことばを捧げます。

そもそも医学教育の目的は私ども人間の健康を保つこと、さらに、より健康であることに役立つ医師の育成にあると私は思います。

その医学教育の第一歩は解剖学実習から始まるのであります。当大学では解剖学教室をはじめ大学当局の一方ならぬご努力により、実習をすべて献体されたご遺体で行えるに至っております。

このように実習を行うことができるようになったのは、昭和30年以来医学教育のお役に立とうではないかと呼びかけている白菊会に共鳴し入会されて「無条件・無報酬」という極めて不合理ともいえる「献体」

わが浜松医科大学も昭和49年の開学以来、今年で開学40年目を迎えました。現在までに、本学医学部医学科を3460名が卒業し、また、看護学科を1,099名が卒業して、静岡県を始め、全国の医療の現場で活躍しています。本学に在籍したこれらの医療関係者ばかりでなく、見学実習に来てそれぞれの道に進まれた医療人が、貴重な御献体から学ばせていただいたことは、計り知れないものがあります。

今、この慰霊の時に当たり、私どもは、ご家族とともども、故人ご在世中のいろいろな思い出を偲びつつ、大学をあげて、御霊の安らからんことをひたすらお祈りするものであります。

大学は心して目指す目的を誤ることなく、一層の精進を続けますことをここにお誓いします。ご遺族皆様の今後の御多幸をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。



浜松医科大学白菊会会長 布施隆三

を、この大学のために志された「あなた方」のお心と、さらに「献体」を実現して下さったご遺族の勇氣ある決断とご協力が、この大学の教育に貢献されたところは誠に量り知れない多大なものがあると存じます。

学生が勉強する「正常解剖」は病理解剖とは異なり通常3ヶ月ないし6ヶ月がその授業に充てられ、献体後御遺骨が返還されるまでには2年ないし3年後になることもあります。

ひと口に献体といわれますが、そのかげにはこのような長期間を黙々として遺骨の返還を待たれるご遺族のあることを、私どもは忘れてはならないと思います。

それゆえにこそ、当大学におかれては厳粛にして且

つ心のこもったこの慰霊祭が行われることは言をまたないと信じます。

さらにまた、大学当局は「あなた方」の気高い御遺志に報いるためにまた御遺族の心情をも推しはかり無限の感謝をこめて教育に当たっておられるはずであります。ここにおいて学生諸君はこのような「献体の実態」を認識されて「医道に目覚めた」心温かい医師医

学者となるための勉学をつづけられることを私どもは祈念して止まないものであります。

終りにのぞみ、私にご遺族に感謝申し上げるとともに「献体」を全うされた皆さま方のご生前をしのびつつ、本日参列の浜松医科大学白菊会会員を代表してここに恭しく謹んで追慕のことばを捧げ、在天の御霊のご冥福をお祈りするものであります。

◇慰霊の詞

新天会を代表して、慰霊の言葉を述べさせていただきます。

「人はどこから来てどこに行くのか」と言う問いをもちながら、走り続け、最後の証として、解剖献体自ららの体を捧げた諸先輩達の勇気と誠実さに、心から感謝と敬意を表します。また、献体を支持くださいましたご遺族の皆様に、言い尽くせぬ感謝と哀悼の言を捧げます。

本年、解剖献体されたご夫人との最後の言葉を思い出します。このご夫人は90歳を過ぎ、顔の色は黒く、深いシワのある方でした。瀬戸内海の小さな島で、潮風と眩しいほどの太陽の中で生きた方でした。戦後、多くの乳児とともに、小島の乳児院で生涯をすごされました。お亡くなりになる一カ月前の事でした。「今度、肌がきれいになる講義をしてくれませんか」と言われました。私は、どうしてこのご高齢の夫人がこのような事をいうのだらうと、不思議におもいました。「どうして？」と聞き返しました。「若い学生さんた

新天会会長 金谷節子

ちに、私の解剖を気持ち良くしてもらいたいの」そういわれた一ヶ月後の朝、静かに天に移されました。

最後の瞬間まで、若き学生の皆さんのために思いを尽くす姿勢に、「言い尽くせぬ愛と心の輝き、人の生き様」を学びました。

学生の皆さん。この実習をとおし、医師や医療に進む決意はできたでしょうか。

長い人生には多くの山や谷があります。不条理の中で、打ちひしがれる時もあるでしょう。その時、この解剖実習を思い出して下さい。解剖に捧げた勇気のある方々をおもい、身と心を奮い起こし、医の原点としてください。そして、志し高く、強く、遠くへ、走るべき行程を走り続けてください。

ご遺族の皆様、悲しみや苦しみの中で、「こうすれば良かった、ああすれば良かった」と想い悩むことでしょうか。今はすべてを天にゆだねましょう。そして私たちも、先輩達に習い、走るべき行程を、終わりの時まで、真剣に走り続けましょう。



◇慰霊の詞

本日、ここに浜松医科大学解剖体慰霊祭が執り行われるにあたり、医学の教育・研究のために献体された故人のご霊前に浜松医科大学の職員を代表し、謹んで慰霊の詞を捧げます。

近年、医学は飛躍的に進歩しており、臨床医学に応用可能な基礎研究はめざましい成果を上げ、これらを礎とした新しい診断・治療法が次々と開発されています。しかしながら、今もなお、多くの方々が治療困難な病に苦しんでおられることも事実であります。浜松医科大学に奉職している私たちは、治療の難しい病の原因を解明し、新しい診断・治療法を開発すると共に、これらに貢献できる医学研究者を育成することが責務であると考えております。

人体の構造を学ぶ正常解剖は、医学生にとって生涯忘れることのできない貴重な実習となります。解剖の知識を身につけるのみならず、この実習を通して生命

浜松医科大学職員代表 今野 弘之

の尊厳を考える良い機会となります。また、病変を確かめるために行う「病理解剖」は医学の発展に大きな貢献をしております。

「解剖学実習」も「病理解剖」も、「献体」という尊い行為があつてこそ可能となります。「自分の死後も『医学・医療』の発展に役立ちたい」という尊い故人の御心、また、それに同意して頂いたご遺族の御心にお応えする途は唯一「解剖の真の目的を十二分に達成すること」に他なりません。

私たちは、本日この思いを改めて心に刻み、「我々に課された重大な任務」を果たしていくことを、ご参列くださいました皆様にお誓い申し上げます。

限りない感謝の念を御霊に捧げますとともに、心からのご冥福をお祈り申し上げ、慰霊の詞とさせていただきます。

◇慰霊の詞

本日、ここに浜松医科大学解剖体慰霊祭が執り行われるにあたり、私たちの解剖学実習のためにご献体くださった皆様のご霊前に、謹んで慰霊の詞を申し上げます。

浜松医科大学では、二年生で最初の専門科目として解剖学を学びます。私たち医学生にとってこの解剖学は、数ある専門科目のなかでもとても特別な存在です。

人の体に実際にメスを入れて勉強させていただくということは、私たち医学生にしか許されていない、特別な行為です。私自身も、一年たった今でも、初めてご遺体を目の前にし、メスを入れた時のことは、鮮明に覚えています。解剖学実習は、生命の尊さは勿論、医療に携わることへの覚悟と責任を強く感じることで、非常に貴重な機会でした。

人の体はとても複雑です。ただ教科書や図譜を読んで知識を得るだけでなく、実際に自分で解剖することで初めて気づき学び、感じる事が多くあります。解剖学を学べば学ぶほど、今生きているということが、いかにたくさんの工夫に支えられているのかということを実感します。そして、解剖学実習を通して学び感じることで、これから医学を学んでいく上で大

学生代表 中村 美紀子

きな意義を持っています。それは単に、解剖学が医学の基礎になっており、解剖学実習が人体の複雑な構造や機能を正確に学ぶ機会であるということだけではありません。人の性格に個性があるように、臓器の大きさや形、血管の走行まで、人の体の構造もそれぞれ異なります。解剖学実習を通して、教科書や図譜だけでは分からない、一人ひとりの個性を学び、改めてその一人ひとりの生命の尊さを実感しました。また、献体者の皆様が、どのような想いでご自身の体を捧げてくださったのかということを感じ、医療従事者としての使命と覚悟が、より一層はっきりと強いものとなりました。

最後になりましたが、御自身の体を医学の発展のために捧げてくださった皆様、また、その御遺志を深く理解し、献体に御理解くださった御遺族の方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。そして、私たちに、医学を志す者として成長していくための貴重な機会を与えてくださったことに、深い感謝の意を表するとともに、故人の皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

開学40周年記念式典

11月22日(土)浜松市内において、開学40周年記念式典を挙行之、教育・医療関係者等約300人が出席しました。また、式典と同時にシンボルマークの発表と表彰式を行いました。

式典終了後には、「いのちはだれのものか?」と題して、大谷大学教授・せんだいメディアテーク館長 鷲田清一先生による講演会を開催しました。

◇学長あいさつ

浜松医科大学開学40周年記念式典に当たり、ひとことご挨拶申し上げます。本日は、本学の記念すべき40周年を祝して多くの方がお忙しい中をご来臨賜りまして、誠にありがとうございます。

元文部科学大臣遠山敦子先生をはじめとしまして文部科学省の方、特別講演をいただきます鷲田清一先生、多くの国会議員の先生方、大学の学長先生方、県内の首長及び議員の皆様、各病院の院長先生並びに医師会の皆様、同窓会を含め多くの関係者のご出席を賜りました。この場をお借りしましてここから厚く御礼申し上げます。

さて、国立大学が法人化されました平成16年に本学の開学30周年目にあたり、寺尾前学長のリーダーシップ下で法人化の嵐の中を船出しました。現在、第2期中期目標期間の後半となりまして、国立大学は社会から人材育成及びイノベーションの拠点として期待され、本学もこの期待に応えるべく大学改革、機能強化を進めているところでございます。

法人化以後ずっと嵐が吹き荒れ、それはますます強くなっている感じがいたします。そんな中でも本学は施設、設備などを着々と将来のために投資する考えで整備を進め、常に前進を心掛けて参りました。法人化以後10年間は、次の10年、20年のための基礎作りと考え、整備してきましたが、同時に成果も少しずつ上げております。これまでのようにコツコツと頑張っていけば本学は継続性のある発展が期待できると考えております。

教育では、平成26年3月ですでに医学部医学科は3,460名、看護学科は1,099名、助産学専攻科は82名の卒業生を輩出しており、医療のあらゆる分野で活躍しております。医学生募集人員は現在1学年120名で、きめ細かな指導を心掛け、国家試験合格率はいつも上位に入るほど頑張っております。今後、毎年80名前後の卒業生が静岡県内に定着していき、地域に貢献していくものと期待しております。

研究については、光医学を中心とした独創的研究と新しい医療技術の開発に取り組んでおり、とくに光量子医学研究センターと分子イメージング先端研究センターをメディカルフォトンクス研究センターに統合するなど、本学を光技術を駆使した光医学の分野で特色のある大学とし、素晴らしい成果を上げ

学長 中村 達

ているところでございます。また法人化後、日本の科学論文は減ったと言われていたのですが、本学においては平成19年ごろから組織の機能強化を図ってきた結果、むしろ増加しております。教員もそれを支える職員も一丸となって頑張っているところでございます。

診療関係では、病院は病棟を新築させていただき、外来棟は昨年改修を終えました。最新の医療機器を備え、先進医療を提供し、患者さんへのサービスを充実させるとともに、大災害発災時にはハード面もソフト面も地域に貢献できるよう整備しております。これらのことは国立大学が法人化後、自律性をもって整備し、法人化のメリットを最大限に利用して地域への貢献を明確に示すものでございます。すでに日本は高齢化社会に突入しております。本学の地域医療への貢献は益々必要性が高まっております。社会の変化に伴い、方向性を見失うことなく地域貢献に尽くし、同時に世界にきらりと光る研究成果を発信していく所存でございます。

本日ここにご列席の皆様におかれましては、浜松医科大学を引き続きご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますが、皆様への感謝の気持ちを述べますとともにご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



◇シンボルマーク

開学40年を機に、本学の特色や個性を社会にアピールし、地方の方々に親しみを持ってもらえるようなシンボルマークを全国一般公募しました。291点の応募作品の中から、デザイナー小池友基氏の作品を最優秀賞として「シンボルマーク」に採用されました。

シンボルマークは今後、本学ホームページや出版物などあらゆる場面で活躍します。



コンセプト

本学のローマ字での頭文字「h」をデザイン化。水色部分が遠州灘（下部分の曲線）、浜名湖の水面、浜松から望む富士山（右上の突起）で浜松の特色、全体の曲線が生命の源である自然な水の揺らぎが医療の重要キーワード「生命」を表現しています。また、オレンジ色と水色部分の両方を合わせて全体を見ると、元気、健康、躍動を表現した人（丸を頭、水色の両端手に見立てる）に見えます。人類の健康と福祉に貢献することをイメージしています。

永年勤続者表彰

11月19日（水）、本学において永年勤続者表彰式が執り行われ、学長から次の方々に表彰状が授与されました。

【永年勤続表彰者】

佐藤 美保（眼科学講座 准教授）
渡邊 裕司（臨床薬理学講座 教授）
長田 哲次（歯科口腔外科 講師）
伊藤 由紀子（検査部 臨床検査技師）
竹原 康雄（放射線部 准教授）
本多 章二（栄養部 調理師）
小林 利彦（医療福祉支援センター 特任教授）
鈴木 麻里子（看護部 副看護師長）
鈴木 洋子（看護部 副看護師長）
森川 峰行（施設課 係長）
森田 浩之（学術情報課 係長）

【列席者】

中村 達（学長）
小出 幸夫（理事・副学長）
鈴木 修（理事・副学長）
前田 広（理事・事務局長）
西山 仁（監事）
津田 紘（監事）
今野 弘之（副学長）

【式次第】

開式
表彰状授与（記念品贈呈）
被表彰者謝辞
閉会式



人事交流職員との懇談会

12月19日（金）、本学看護学科棟2階会議室において、現在、国立遺伝学研究所、国立中央青少年交流の家、大学評価・学位授与機構及び文部科学省に出向している6名の事務職員を迎え、懇談会を開催しました。

会に先立ち、個別面談の時間を設け、現在の職務状況や職員自身の健康状態等について、個々の職員の話听取了きました。

懇談会には人事交流職員と事務局関係職員が出席し、関係職員の紹介の後、人事交流職員から出向期間の現状や職務に関連した最新情報等について報告するなど、活発な意見交換が行われました。



学会・研究活動

第26回日本生命倫理学会開催

総合人間科学講座（倫理学）教授 森下 直貴



日本生命倫理学会の第26回大会が平成26年10月25-26日、浜松アクトシティ・コンgresセンターにて開催されました。学会発足から四半世紀の節目を迎えた日本の生命倫理学は、あらためてその原点を問い直し、次の四半世紀へ向けて針路を定める必要があります。そこで大会のメインテーマを「生命倫理学の新紀元へ——哲学および法制度との接続」とし、これに関連する大会・学会企画シンポジウムを4つ設定しました。それが「生命倫理と医療倫理」、「生殖医療基本法の意義と課題」（野田聖子衆議院議員の特別講演）、「科学の不正と対策の『くり返し』を越えられるか」（大西隆日本学術会議会長の基調講演）、「ロボットとの共生」です。また、それとは別に、個人研究発表27、公募シンポジウム9、公募ワークショップ7、ポスター発表11がありました。会員数1200名のうち大会参加者が400名を越え、地方都市開催としては盛会でした。

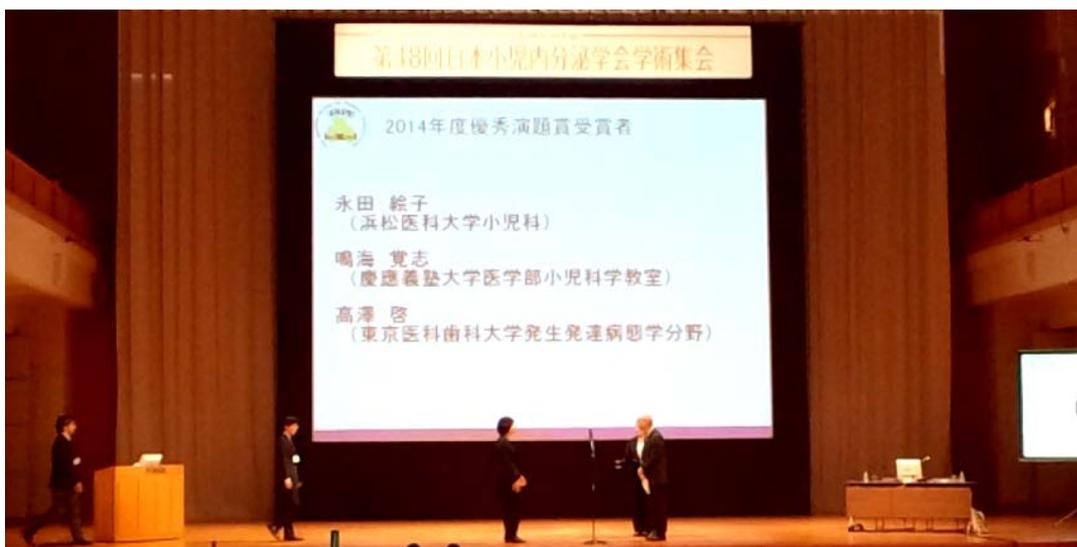
第48回日本小児内分泌学会開催

小児科学講座 教授 緒方 勤

上記学術集会を、平成26年9月25日（木）～27日（土）、アクトシティ浜松において開催しました。日本小児内分泌学会は臨床面でも研究面でも大きな飛躍を遂げています。本学術集会では、鎌谷教授による「遺伝学」の特別講演、Gudrun Rappold教授、Cheri Deal教授による基礎的および臨床的内容のプレナリーレクチャー、「小児慢性特定疾患」のシンポジウム、分野別小児内分泌アップデートが行われ、大好評でした。さらに、国際交流の推進のために、English Sessionを開催し、会場に入りきれないほどの若手医師が参加し、大盛況となりました。

浜松医科大学小児科学講座として、強調したいことは、浜松医科大学小児科の永田絵子医師が「最優秀若手演題賞」を受賞したことです。ま

た、写真のように緒方が日本小児内分泌学会理事長であったことから、直接賞状を授与できたことも大きな喜びでした。さらに、永田絵子医師は、来年度の米国日本小児科学会交流発表においても日本小児科学会を代表して講演することとなりました。これからも浜松医科大学小児科学講座は、さらなる発展を目指してまいります。



第11回DIA日本年会を開催して—境界を超える医療イノベーションの夜明け—

臨床薬理学講座 教授 渡邊 裕司

DIAは全世界に18,000人以上の会員を有する、医療用製品の研究開発、ライフサイクルマネジメントに関わる専門家のための団体です。特徴は、グローバル性と中立性であり、産官学及び患者さんとの間でのオープンな意見交換ができる貴重な機会を提供し、立場を超えた相互理解に基づく課題解決やイノベーションを促進し、世界の人々の健康と福祉に貢献することを使命として活動しています。

第11回DIA日本年会<<http://www.diajapan.org/meetings/14303/>>は「境界を超える医療イノベーションの夜明け」をテーマに、東京ビッグサイト(有明)を会場とし11月16日からの3日間開催されました。6トラックのプログラム構成で、臨床/薬事/統計/安全性/プロジェクトマネジメント/データマネジメント/CMC/メディカルライティング/シックスシグマ/HTA/患者会等の各領域に関連した数多くセッションが企画され、基調講演では、先端医療振興財団理事長 井村裕夫先生とともに宇宙航空研究開発機構(JAXA)より宇宙飛行士の古川聡先生をお招きしてご講演いただきました。また、PMDAの近藤達也理事長並びにTherapeutic Goods Administration(TGA)のSkerritt長官にご参加いただ

いた特別セッションや、世界初のサイボーグ型ロボットであるロボットスーツ「HAL」を開発された筑波大学大学院教授 山海嘉之先生の特別講演も大変多くの聴衆に恵まれ、医薬品のみならず医療機器開発のイノベーションが現実化しつつあることが実感されました。

充実したプログラムを企画頂いたプログラム委員の方々、運営に携わった事務局の方々、そしてすべての参加者の方々に心から感謝申し上げます。



第19回日本小児外科漢方研究会開催

小児外科 特任准教授 河原 央好

本研究会は日本小児外科学会学術集会でランチョンセミナーを開催するという形式で運営されてきましたが、久留米大学小児外科の八木實先生が会長をされた2009年から独立した研究会としてPediatric Surgery Joint Meeting (PSJM)に参加し、今回で6回目となります。

本研究会の年々の発展と他領域での漢方の普及もあり、小児外科領域でも様々な疾患に漢方薬が使われるようになってきました。今回の研究会では25題の演題の応募をいただき、方剤のレパトリーも対象疾患も

年々多様化してきております。今回は下記の4セッション構成で行いました。

1. 越婢加朮湯・五苓散
2. 六君子湯・大建中湯・小建中湯
3. 排膿散及湯・補中益気湯
4. その他

特別講演として、我々が日頃使用している漢方薬が生薬からどのような過程を経てエキス製剤に製品化されているかについて、長く生薬栽培に携わっておられるツムラの野村秀一先生に「生薬の栽培・品質・確保事情-六君子湯配合生薬を中心に」という演題でお話をさせていただきました。漢方薬会社がアジア各国での生薬の採取、精製、品質安全管理に涙ぐましい努力をされているお話を拝聴させていただき、参加された方にとって興味深い内容でした。議論をより深いものとするために漢方のエキスパートである山口英明先生（公立陶生病院 小児科）、小川恵子先生（金沢大学附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 和漢診療外来）、恵紙英昭先生（久留米大学 先進漢方医学講座）、大谷俊樹先生（かみさぎキッズクリニック）にコメンテーターをお願いし、参加された先生方から勉強になることが多かったとのご意見をいただき、有意義な研究会になりました。



日本描画テスト・描画療法学会第24回大会を終えて

基礎看護学講座 教授 片山はるみ

過日、平成26年9月13日（土）14日（日）の2日間にわたり、日本描画テスト・描画療法学会第24回大会がアクティビティ浜松・コンgresセンターで開催され、無事盛況のうちに行われました。運営には、浜松医科大学医学部看護学科基礎看護学領域、鈴木美奈事務局長を中心とした教職員と大学院生、看護学科学学生有志、総勢25名があたりました。もとよりこじんまりした学会ではありますが、北海道から沖縄まで、文字通り日本全国から、延べ約480名の方々が参加され、各種研修会、ワークショップ、研究発表、事例検討、特別講演、シンポジウム等のプログラムにおいて研鑽されました。

この学会は、心理系の臨床家、研究者が中心となって「描画法」の2つの側面、つまり診断あるいはテスト、またはアセスメントに用いる場合のエビデンスに基

づく診断基準の作成に向けて、そして治療、療育、教育等に用いる場合の効果の検証に向けて、活動している学会です。会員は臨床心理士・カウンセラーと精神科医が中心で、教育、司法・矯正、美術系学生・画家、その他医療従事者（リハビリ、看護）など、様々な、一見異色とも思える分野で活動している人たちが集まるところが大きな特徴です。

今回は看護学領域の大会長でしたから、メインテーマは「ケアと描画」というふうになりました。「治療を超えるケアに」、「こころを超えるスピリチュアリティに」、描画はもっと活かしていける、そんな熱い想いが込められていました。そのようなわけで、特別講演にはスピリチュアルケア学の先駆的臨床家・研究者である聖学院大学の窪寺俊之氏をお招きしました。その後のシンポジウムも、それぞれの話題提供者から実践報告があったのですが、「今、ここで気づいたこと」と言った内容も盛り込まれ、ライブ感あふれる活発なシンポジウムになりました。最終的に、大会長の意図は参加者に共有され、熱い空気で全てのプログラムを終了できたことを、様々な形で大会に携わってくださった方、関心を寄せてくださった方、色々と励ましの言葉をかけてくださった方、全ての方々のお力の賜物であると顧みて、皆様へのご報告とさせていただきます。



研究助成金等の採択（平成26年9月～12月）

単位（千円）

所 属	職 名	研究者	研 究 助 成 機 関	助成金額
子どものこころの 発達研究センター	特任教員	浅野 良輔	公益財団法人 発達科学研究教育センター	500
小児科	助 教	坂口 公祥	公益財団法人 がんの子どもを守る会	150
解剖学（細胞生物 学分野）	教 授	瀬藤 光利	公益財団法人 持田記念医学薬学振興財団	3,000
第二内科診療科群	助 教	藤澤 朋幸	グラクソ・スミスクライン（株）	2,000
薬剤部	副薬剤部長	内藤 隆文	公益財団法人 骨粗鬆症財団	800
医化学講座	助 教	佐藤 英二	独立行政法人 国立青少年教育振興機構	409
子どものこころの 発達研究センター	特任准教授	土屋 賢治	公益財団法人 先進医薬研究振興財団	1,000
第一内科診療科群	メディカル・ アシスタント	市川 仁美	公益社団法人 日本透析医会	1,000
第一内科診療科群	助 教	杉本 光繁	公益財団法人 臨床薬理研究振興財団	2,000



平成26年度厚生労働省科学研究費等補助金一覧

単位(千円)

所属	職名	研究者	代表者 分担者	研究事業名	研究課題名	交付 決定額
	理事(教育・国際交流担当)	小出 幸夫	分担者	新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業	非結核性抗酸菌症の疫学・診断・治療に関する研究	1,420
神経生理学講座	教授	福田 敦夫	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	難治性てんかんを呈する希少疾患群の遺伝要因と分子病態の解明	3,000
腫瘍病理学講座	教授	梶村 春彦	分担者	革新的がん医療実用化研究事業	ゲノム情報で規定される超高リスク群の診断と、層別化・個別化予防のためのエビデンス構築をめざした臨床観察研究	6,000
健康社会医学講座	教授	尾島 俊之	分担者	厚生労働科学特別研究事業	健康寿命の国内と海外の現状把握と分析評価に関する研究	800
健康社会医学講座	教授	尾島 俊之	分担者	長寿科学研究開発事業	データに基づき地域づくりによる介護予防対策を推進するための研究	1,400
外科学第二講座	教授	今野 弘之	分担者	革新的がん医療実用化研究事業	網羅的ドライバー遺伝子変異検索に基づく耐性GISTの治療薬開発	1,500
皮膚科学講座	教授	戸倉 新樹	分担者	難治性疾患等実用化研究事業(免疫アレルギー疾患等実用化研究事業(免疫アレルギー疾患実用化研究分野))	表皮を標的としたアトピー性皮膚炎の治療の最適化を目指す新規薬剤の開発	1,750
皮膚科学講座	教授	戸倉 新樹	分担者	革新的がん医療実用化研究事業	臨床試験、発症ハイリスクコホート、ゲノム解析を統合したアプローチによるATL標準治療法の開発	2,000
皮膚科学講座	准教授	平川 聡史	分担者	革新的がん医療実用化研究事業	がん治療に伴う皮膚変化の評価方法と標準的ケア確立に関する研究	3,000
眼科学講座	教授	堀田 喜裕	分担者	障害者対策総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業(感覚器障害分野))	小児・若年者の視覚障害の早期発見・診断・治療・訓練・リハビリ等の自立支援に資する技術開発等に関する研究	900
小児科学講座	教授	緒方 勤	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	細胞内シグナル伝達異常による先天奇形症候群の病態解明と治療法開発の研究	500
小児科学講座	教授	緒方 勤	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	インプリンティング異常症および合併症発症メカニズムの解明:患者由来iPS細胞を用いての研究	3,000
小児科学講座	教授	緒方 勤	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	性分化・性成熟領域38疾患の診療ガイドライン作成に向けた遺伝子診断法の確立	4,000
小児科学講座	教授	緒方 勤	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	小児科・産科領域疾患の大規模遺伝子解析ネットワークとエピゲノム解析拠点整備	3,750
小児科	准教授	福田 冬季子	分担者	難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	新生児タンデムマススクリーニング対象疾患の診療ガイドライン改訂、診療の質を高めるための研究	500

会 議

9月1日 第5回組換えDNA実験安全委員会* 第2回物流管理委員会	9月25日 第26回診療情報管理委員会
2日 第7回教務委員会 第6回臨床研究倫理審査委員会	30日 第80回臨床研修管理委員会 第5回経営企画室会議
3日 第188回病院運営企画室会議	10月1日 第190回病院運営企画室会議
4日 第4回学生委員会	2日 第2回助産学専攻科委員会
8日 第178回知財活用推進会議	6日 第6回組換えDNA実験安全委員会*
9日 第1回臓器提供委員会 第3回輸血療法委員会 第8回教務委員会* 第5回国際交流委員会 第3回図書館運営委員会	7日 第7回臨床研究倫理審査委員会 第9回教務委員会
10日 化学療法部連絡協議会 第6回大学院博士課程部会	8日 化学療法部連絡協議会 第7回大学院博士課程部会
11日 第120回教育研究評議会	9日 第121回教育研究評議会 第5回学生委員会
12日 第3回ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会	10日 第6回入学試験委員会 第5回大学院修士課程部会
16日 第126回研究推進企画室会議 第134回研究推進委員会 第5回入学試験委員会 第6回感染対策委員会 第6回医療安全管理委員会 第4回大学院修士課程部会	16日 第747回教授会 第509回大学院博士課程教授会 第137回大学院修士課程教授会
17日 第3回医の倫理委員会 第189回病院運営企画室会議 第107回教育企画室会議 第5回情報・広報企画室会議	17日 第6回情報・広報企画室会議
18日 第746回教授会 第508回大学院博士課程教授会 第136回大学院修士課程教授会	21日 第127回研究推進企画室会議 第135回研究推進委員会 第8回動物実験委員会* 第7回感染対策委員会 第7回医療安全管理委員会 第6回国際交流委員会*
19日 第7回動物実験委員会* 第3回薬剤管理委員会	22日 第108回教育企画室会議 第4回開学40周年記念誌編集専門委員会
22日 第114回総務企画室会議 第55回外来診療部会議	23日 第116回診療科長・中央診療施設等部長会議
24日 第17回病床管理委員会	24日 第6回(臨時)学生委員会
25日 第3回調査労務企画室会議 第115回診療科長・中央診療施設等部長会議	27日 第179回知財活用推進会議
	28日 第6回経営企画室会議
	29日 第4回調査労務企画室会議 第191回病院運営企画室会議
	30日 第115回総務企画室会議
	11月4日 第8回臨床研究倫理審査委員会
	6日 第7回学生委員会
	10日 第180回知財活用推進会議

11月10日 第7回経営企画室会議* 第56回外来診療部会議	12月3日 第193回病院運営企画室会議 第9回大学院博士課程部会
11日 第4回輸血療法委員会 第10回教務委員会 第4回図書館運営委員会	4日 第123回教育研究評議会 第15回児童虐待・養育困難対応委員会 第8回学生委員会
12日 第4回医の倫理委員会 第8回大学院博士課程部会 第6回大学院修士課程部会*	8日 第8回入学試験委員会 第181回知財活用推進会議
13日 第122回教育研究評議会 第138回大学院修士課程教授会*	9日 第7回組換えDNA実験安全委員会* 第1回看護委員会 第7回大学院修士課程部会 第8回国際交流委員会
17日 第7回入学試験委員会 第4回ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会 第3回物流管理委員会	11日 第749回教授会 第511回大学院博士課程教授会 第139回大学院修士課程教授会
18日 第128回研究推進企画室会議 第136回研究推進委員会 第8回感染対策委員会 第8回医療安全管理委員会 第7回国際交流委員会	12日 保健管理センター運営委員会 15日 第57回外来診療部会議 16日 第129回研究推進企画室会議 第137回研究推進委員会 第9回感染対策委員会 第9回医療安全管理委員会
19日 第192回病院運営企画室会議 化学療法部連絡協議会 第109回教育企画室会議	17日 第194回病院運営企画室会議 化学療法部連絡協議会 第2回保険診療委員会 第110回教育企画室会議
20日 第748回教授会 第9回動物実験委員会* 第510回大学院博士課程教授会	18日 第81回臨床研修管理委員会 第8回情報・広報企画室会議
25日 第8回経営企画室会議 第7回情報・広報企画室会議	19日 第195回病院運営企画室会議*
26日 第18回病床管理委員会	22日 第117回総務企画室会議 第10回動物実験委員会*
27日 第5回調査労務企画室会議 第117回診療科長・中央診療施設等部長会議 第27回診療情報管理委員会 第4回薬剤管理委員会	22日 第10回大学院博士課程部会*
28日 第116回総務企画室会議	24日 第6回調査労務企画室会議 第9回経営企画室会議
12月2日 第9回臨床研究倫理審査委員会 第11回教務委員会	25日 第107回総務企画室会議 26日 第118回診療科長・中央診療施設等部長会議

* 持ち回りにて開催したもの

発行

浜松医科大学広報室

浜松市東区半田山1-20-1

電話：053-435-2114

Email：koho@hama-med.ac.jp